

第4回研究会

ラムサールシンポジウム2016 中海・宍道湖への参加・報告

龍谷大学大学院政策学研究科

赤松 喜和

龍谷大学政策学部・准教授/里山学研究センター・研究員

金 紅実

2016年8月27日(土)～29日(月)にかけて、鳥取県米子市でラムサールシンポジウム2016が開催された。筆者は当シンポジウムに参加し、これまで取り組んできた京都市伏見区宇治川左岸に位置するヨシ原における大学生の保全活動について事例報告を行った。

(1) ラムサールシンポジウム2016の概要について

国内のラムサール条約登録湿地第1号である釧路湿原の登録から20年が経過し、現在国内で登録総数は50か所に及んでいる。湿原、湖沼、干潟、水田と登録対象の環境は多様に及んでいる。“湿地”や“ラムサール条約”という言葉が人々に認識され、自治体や市民が湿地保全の活動に取り組んでいる。

一方で、登録湿地以外の湿地の環境汚染の問題、活動の行き詰まり（固定化）の問題、それに対する具体的な計画の策定や人々の参加といった課題がある。そのため、当シンポジウムは、事例報告を通して国内の湿地保全の現状と課題を共有し、今後の活動の活発化を図ることを目的に開催された。

27日(土)には現地調査として、宍道湖エクスカージョン（宍道湖における保全活動の報告と施設見学）が行われた。28日(日)、29日(月)は米子全日空ホテルにおいてシンポジウムの開催、基調講演と3つのセッションが設けられた。3つのセッション、(1)日本の湿地を取り巻く状況はどう変わったか、(2)湿地を地域にどう役立てるか、(3)湿地の管理に携わる人々の活動を強化するには、とテーマが事前に設定され、口頭発表者が選択して、各々課題に基づき報告を行った。筆者は(1)のテーマで発表を行った。以下より報告内容を記す。

(2) シンポジウムでの報告内容について

シンポジウムでは、「京都伏見のヨシ原について～歴史、現状と課題～」というタイトルで報告を行った。報告概要は以下のとおりである。

京阪中書島駅以南、宇治川河川敷に約35haのヨシ原がある。巨椋池のヨシ原、宇治川のヨ

シ原、呼び名は様々だが、本稿では「伏見のヨシ原」としている。伏見のヨシ原がある場所には、かつて京都府下で最大の淡水湖が広がっていた。漁業が盛んで、周辺には漁家が立ち、湖の周囲に生えるヨシをヨシズや屋根葺きに使い、ヨシを生業とする人々（ヨシ屋）がいた。しかし、流出河川が1本しかない琵琶湖から流れてくる多量な水で宇治川（淀川）は洪水が多発した。そのため、1896年～1910年にかけて、治水事業である淀川改良工事が行われた。これにより、宇治川の遊水池機能を果たしていた巨椋池は完全に宇治川と切り離されたが、水位は低下し、水質は急激に悪化した。漁獲量は減少、風土病の流行で環境悪化が進行し、巨椋池周辺に暮らす住民の要望で、田地に変える干拓運動が起こった。治水事業後も堤防が決壊し、洪水被害も受けていたことから、1933年に国営の干拓事業が開始された。現在は大部分が田地になり、域内の人口増加で一部が宅地化されている。

巨椋池の名残として、伏見のヨシ原がある。近畿地方で最大のツバメの埒地であることが明らかにされており（須原恒「ツバメの集団埒地となるヨシ原の重要性」『関西自然保護機構会報21巻2号』、187-200、1999）、生物多様性を育む場として重要な環境であると言える。かつては、ヨシ屋により、ヨシ原は定期的に管理されていたが、外国産ヨシ材の流入や、茅葺家屋の減少により、ヨシ屋の多くが消滅した。現在は屋根葺きを行う会社が1社で管理を行っている。毎年、一定の区域でヨシ刈りとヨシ焼きを行っている。人手による管理を怠ると、ヨシ原は藪化し、真っ直ぐで丈夫なヨシが生えてこない。ヨシ材の確保、他方で生物にとっての適切な生息地を維持するため、定期的なメンテナンスが必要である。しかし、管理主体が限られており、ヨシの価値が低下する中で、人材や費用の確保が難しい状況にある。

そこで、龍谷大学政策学部金ゼミの学生たちがヨシ製品の新規開発や市民向け環境教育を提案し、ヨシ原保全の取り組みをととした環境教育を行ってきた。伏見のヨシ原では、以前より市民団体がツバメの観察会を実施していた。観察会はツバメの飛来数がもっとも多い時に開かれ、参加者数も100名を超える人気のイベントである。親子での参加が目立っていた。ただ、“ヨシ原”や“ツバメ”の存在は知っていながら、近畿地方で最大の埒地であることは広く知られていなかったため、貴重な生態系を有する環境であることを伝えることは重要だと考えた。特に、親子世代をターゲットにして、行政が主催するイベント等に出向き、ポスター展示・口頭発表とヨシ紙作りの体験型環境教育を行った。参加者の中には、「旧巨椋池を知っていて、一帯は大きく変わったが、ヨシ原だけは消えないでほしい」といった声や、「ヨシ紙で葉書や葉を作るといい」という提案が出された。

最後に今回のシンポジウムへの参加をとおして、筆者の感想を記しておきたい。当シンポジウムに参加したきっかけは、ヨシ原保全の取り組みの報告と活動上の課題を共有したいと思ったからである。伏見のヨシ原は、ラムサール条約登録湿地ではなく、保全のための計画や施設は存在しない、いわゆる全国的には無名の環境である。しかし、放置されがちな環境だからこそ、その価値を伝える必要があると考えた。

登録湿地では国や自治体が長期的な計画を策定し、保全に取り組んでいるが、それ以外は市民団体が中心である。環境を再生する、維持することは重要だが、それを行う人あるいは係る費用を賄うにはボランティアでは限界がある。事例発表では、そのような意見が多く出た。シンポジウムを通して、この課題を乗り越える、『連携』が生まれたように思う。